

埼玉親善大使のレポート

留学先：ドイツ ノルトライン＝ヴェストファーレン州

名前：杉原 弘祐

この度は「埼玉発世界行き」奨学金に合格をさせていただき、本当にありがとうございました。

平成 30 年 7 月 6 日をもちまして、約 11 か月の留学が終了しました。こちらのレポートで私が埼玉県親善大使として現地で行った活動について報告させていただきます。

私は渡航後 3 週間のドイツ語研修ののち、現地のプラシーダ職業高校に就学し、交換留学生として高校生活を送ってきました。日本人として学生や地域の子供達とたくさん出会う機会がありました。現地の方々は「日本人」と聞くと、アニメや電車、地震や 2020 オリンピックなどを話題になりました。しかし、日本の出身地をお話しすると、「埼玉」というと必ず「そこはどこ？」と聞かれるため、外国の人々にとっての「埼玉」は、ほぼ知名度がないに等しいと感じました。そして埼玉親善大使としての活動の責務を感じたところです。

私は、渡航してまもなく地方の新聞社にインタビューを受ける機会をいただきました。しかし、当時はまだ派遣国の生活や会話力も拙い頃でした。自分の出身は「埼玉県」であると伝えたつもりでいましたが「さいたま市」と混同され、出来上がった記事を読んでもみると、ホームステイしていた「バルヴェ」という町と「さいたま市」の人口を比較した記事になっていました。やはりインタビューを受けた自分の語学力の低さを痛感しましたが、ドイツの WEB サイトに今でも掲載され、ささやかですが埼玉の知名度アップに貢献し、埼玉に興味をもってもらえるようになったなら嬉しいと思います。

COME-ON. DE

<https://www.come-on.de/lennetal/balve/japanischen-grossstadt-beschauliche-balve-8737515.html>



COME-ON ドイツ取材をホストファミリーと受けた時の写真

ドイツへのお土産は、母の友人である埼玉の陶芸家の新妻さんの音階が1オクターブ出る「ネコリナ」を持参しました。最初はねこの置物だと思っていたようですが、「どうやってふくの？」と聞かれ、ホストシスターがフルート奏者でもあったため、一緒に演奏できたのは今ではとてもいい思い出です。お世話になったホストファミリーに日本の土、埼玉の窯で作ったものプレゼントすることが出来てよかったです。

ドイツでの食生活で、驚いたことは日本と違う「おやつ」の考え方です。お土産に「草加せんべい」や他に甘いお菓子などを持っていき、紹介しながら一緒に食べました。私の感覚では、甘くない「お煎餅」も甘い「チョコレート」なども、「おやつ」だと思っていました。でもドイツの人々は「おやつは甘い物だけ」として認識しており、せんべいは「昼ご飯」と呼んでいたのには、やはり文化の違いを感じました。

甘い物好きのホストファミリーや友人たちに川越の菓子屋横丁を紹介したりしました。

来る2020年オリンピックのサッカー会場が埼玉県にあるなどの話もしました。日本でもサッカーワールドカップで盛り上がっていたと思いますが、現地でも大変な熱狂ぶりでした。驚いたことに私の友人たちは、私以上に日本人プレーヤーを知っていました。「浦和レッズが好き」と伝えると、「知っている」と返答を聞いた時は、あまりサッカーに詳しくない自分にとって、とても嬉しく大変驚くこともありました。

またドイツと同じように日本も自然が豊かなという共通点から、多くの現地の方々に「埼玉」に興味を持ってもらえました。全く「埼玉」を知らなかった地元の人々が自分の説明によって「行ってみたい」という声を聞いたときには、言葉にはならない喜びを感じました。



10 カ月通学したプラシーダ職業高校



クラスメイトと

今回ありがたいことに奨学金を頂き、埼玉親善大使に任命されたことによって、自分自身より深く埼玉県を知る機会となりました。そして更に、外国の方々に興味をもつように説明する努力の必要性や、それができたときの達成感を味わうことができました。このようなチャンスを与えてくださった「埼玉発世界行き」奨学金制度に再度感謝申し上げます。ありがとうございました。